

観光の栄光と悲惨

——観光学の視点——

はじめに

- 一、「観光」のたどった途
- 二、観光の意義
- 三、観光往來の現状
- 四、観光の向日性とリヴィエラ
- 五、観光事業の諸相
- 六、地中海クラブ
- 七、「買春観光」
- 八、観光における性
- 九、観光と人間性

栗原孟男

はじめに

本稿は、アルフレ・ド・ヴィニイ (Alfred de Vigny) の作品の題名“*Servitude et Grandeur Militaire*”からヒントを得て題したものである。“*Splendeur et Misère Touristique*”とでも言うべきか。過般、東南アジア方面における日本人旅行者の行状が新聞紙上を賑わせていた頃、不図こういう題目で書いてみたいという気になった。観光関係の講座を担当するものの弁明としても書いておきたいのである。

一、観光のたどった途

「観光」という言葉は、易経の「觀国之光、利用賓于王。」から生まれたという。この語は、日本語としての発音は易しく、かつ女性的とも言えるような平和の相を内包しているために、甚だ便利に、多くの企業の名に接頭辞的に冠せられて使用された。しかも、それらの名がある種の効果を挙げてきており、文字の誤用として難ずるわけにもいかなかったのである。そして「観光」ということの意義は兎も角として、その文字にはある種のイメージが定着するに至った。すなわち、「観光」は、温泉旅行、客引き、宴会、放歌高吟、女あそび、ギャング等々、好ましいとは申しかねるようなことに随伴する言葉として通用するに至ったわけである。この現象は敗

戦直後に特に著しかった。

この濫用から「観光」を救い、その文字からいかがわしいイメージを払拭し、正しい、あるべき観光の姿を確立しようとしたのが観光基本法の制定であった。昭和三十八年のことである。極めて格調高く観光の理念を謳いあげている。幾つかの大学にはじめて観光学科が設けられたのもその頃である。

「観光」の文字のたどった途は上記のようであったが、観光事業としての観光の概念は、昭和の始め頃、外国から輸入されたものと言えるであろう。主として経済的な観点に立つものである。昭和五年四月、わが国に観光の主管官庁としてはじめて国際観光局が設立されたとき、その英文名は“The Board of Tourist Industry”であった。観光事業遂行の主たる目的を国際収支の改善に置いたことは、これによっても明らかである。いわゆる「見えざる輸出」の増大を図り、外貨の獲得を至上命令としたわけである。

二、観光の意義

そもそも観光とは何であるか。

多くの研究者が観光を定義することに苦心した。「観光とは、人が日常生活圏を離れ、再び戻る予定で、レクリエーションを求めて移動することである。」これは井上萬寿蔵氏の与えた定義である（註一）。また、ドイツのグリュックスマン博士は、「観光（事業）は、臨時滞在地における外来者とその土地の人々との間の諸般の関係の総体である。」と定義した（註二）。さらに、同じくドイツのポールマン博士は、観光の概念をば、「旅行が、

保養・遊覧・商用・職業等の目的をもつにせよ、或いはその他の理由、たとえば特殊の催しや特殊の事情によるにせよ、およそ定住地から一時的に離れる旅行はすべて観光と称し得る。しかし、ここに職業上の交通という場合には、勤務先へ定期的に通う交通は含まれていない」と説明している(註三)。

また、別の角度から、すなわち、観光の主体としての人を中心として観光を考えようとする立場もある。一九六三年、ローマで国際観光会議が開かれたが、そのとき採択された定義では、特に統計上の便宜をはかることを考慮し、観光を行うものを「ビジター」(visitor)と呼び、これを「平常居住している国以外の国を訪問するすべてのもの」とした。ただし、訪問国で報酬を得る職業に就くための訪問はこれを除いている。

右の定義によれば、「訪問国に少なくとも二四時間滞在する一時的訪問者をツーリストとし、ツーリストはその訪問の目的が次に掲げる項目の何れかに該当するものでなければならぬ。

(a) レジャー(レクリエーション、休暇、健康、勉強、宗教、スポーツ)

(b) 商用、家族、布教、会議。

訪問国に二四時間以内しか留まらない一時的訪問者をエクスカーションニストとし、これにはクルーズの乗客を含むものとする。」となっている。この定義では、法律的には入国していないもの、たとえば空港の外に出ないトランジットの旅客は除外されている。

スコットランドはグラスゴウのストラスクライド大学で観光を講じているジョン・ヒーリー(John Heeley)氏は、ルビュー・ド・ツーリスム誌に「英国における観光の定義(註四)」と題する論文を寄せ、英国においても観光の定義が未だ統一されておらず、様々な定義が行われていることを報告している。観光とは人々が自分の家庭を離れて一時的な移動を行うことである、という基本的な点についてだけは一致しているが、その移動(旅

行)の性質、範囲、ないしはその特色等についてはかなり議論が分かれていると述べて、幾人かの研究者の所論を紹介している。

この論文の中で、ヒーリー氏は、観光の定義は大きく言って二つに分けられる。一つは、観光の本質を明らかにしようとするもので、これを「概念的定義」(conceptual definitions)と呼ぶとし、他の一つは、観光行動を行ふもの、すなわち、ツーリスト、ビジター、休暇旅行者、エクスカーションリスト及び日帰り旅行者を明示するもので、統計の作成や観光往来の報告などに多く使用される。これを「技術的定義」(technical definitions)と名づけている。これによれば、井上氏やグリュックスマン博士の与えた定義は前者であり、ローマの国際観光会議が採択した定義は後者に属するものと考えられる。

さてここで、もう一度、観光とは一体何であるか、を問うてみよう。

フランスのピエール・ドフェール (Pierre Defert) は答える。観光に定義を与えることは極めて困難であり、言い得べくんば無意味なことだ、と。観光現象の領域は極めて広くかつ複雑多岐にわたっているので、これを数行の文字で表現するのは不可能である。観光についての研究が進んでくるにつれて、これに満足のできる定義を与えるのはいよいよ困難になって来た。

今や観光は、経済学は言わずもがな、社会学、心理学、文学、政治学、法学、地理学など、数多の学問のそれぞれの領域において研究対象となっている。観光現象を総合的に把握分析する観光学が極めて学際的な multi-disciplinary な学問と称される所以である。

観光ということが、明確な一刀両断的な定義を持ち得ないということ、明快な境界線をもって他とはっきり区別し得ないということ、稜線は青空を背景にクリアカットに現われているが、麓の方は模糊として靄の中に沈ん

でいるという状況、換言すれば、それは極めて人間的であるということ、ここに学問の対象として見た観光の特徴があるのである。

何れにせよ、観光は人間の行うことである。人間生活の一面である。人間の生命の鼓動を伝えるものである。人間に完璧な善人はなく、また、完全な悪人というものも存しない。善と悪と、美と醜と、明と暗と、動と静と、すべての人がこの両面を内包している。してみれば、観光に栄光と悲惨という一種の ambivalence が内在するのは当然のことであろう。

三、観光往来の現状

ここで、最近の観光の現状を簡単に紹介しておきたい。観光の動きを量の面から捉えたものである。

わが国から海外に渡航した旅客数は、一九七九年には四百万人を越えた。しかし、法務省の出入国統計(註五)によれば、八〇年には三・二%、約一三万人減少して三、九〇九、三三三人であった。台湾向けが五・五%減の五八四、〇〇〇人、韓国向けが政情不安を反映してか前年対比一八・七%、約一〇万人の減で四二八、〇〇〇人となり、これが総数の減少した主たる原因であった。逆に、わが国を訪れた外国人旅客数は、前年に比べ一九%増で一、二九五、八六六人に達し、過去十年間の最高を記録したのである。

世界の状況を見ると、一九七〇年に国際間を移動した旅客総数は一億六、八〇〇万人であったが、八〇年には六一%上昇して二億七、〇〇〇万人に達したものと推定される。また、国内と国際を合せた世界の総観光支出

観光の栄光と悲惨（栗原）

	国際旅客数 (単位：100万人)	前年比 (%)	観光消費額 (単位：10億ドル)	前年比 (%)
1960	71.2		6.8	
1961	75.3	5.8	7.3	7.4
1962	81.4	8.1	7.8	6.8
1963	93.0	14.3	8.3	6.4
1964	108.0	16.1	9.6	15.7
1965	115.0	6.9	11.0	14.6
1966	130.8	13.2	12.5	13.6
1967	139.5	6.7	13.4	7.2
1968	139.7	0.1	13.8	3.0
1969	154.1	10.3	15.4	11.6
1970	168.4	9.3	17.9	16.2
1971	181.5	7.8	20.9	16.8
1972	198.0	9.1	24.2	15.8
1973	215.0	8.6	27.6	14.0
1974	201.4	-6.3	34.1	23.6
1975	206.9	2.7	38.6	23.2
1976	227.0	9.7	43.7	13.2
1977	243.6	7.3	52.4	19.9
1978	259.2	6.4	65.1	24.2
1979	270.0	4.2	75.0	15.2

は、一九七九年において実に五、八〇〇億ドルと推定される。これは世界のGNPの五・二%に当り、世界各国の軍事支出総合計四、二五〇億ドルを凌駕している。次に、参考のために世界観光機関(World Tourism Organization)がまとめた最近二十年間の世界統計を掲げておく。

これらの数字が示すように、今や観光は一つの巨大産業である。近年、世界の経験した政治経済上の大きな変動にもかかわらず、観光往来は年平均六%の割合で上昇を続けて来た。観光産業が多くの障碍を乗り越えて生きのび、かつ成長することができたのは、それが数多の小企業の集合体であるからであろう。変転する状況や需要に即応して直ちに対処できる柔軟性が強味なのである。但し、経済協力開発機構(OECD)のいう先進工業国における一二・五%のインフレーションが、世界の旅行業界を脅かしていることは事実である。

観光を人と金との量の側面から捉えることは、前に述べた観光の技術的定義から出発している。観光政策を決定し、観光宣伝の機構や宣伝費の規模を定めるのは専らこの数字に基づいて行われる。それ故、観光の論議は、従来、この数字を終着点としてきた感がある。

四、観光の向日性とリヴィエラ

そもそも観光ということは「水杯をかわして」出かけるものでもなく、眈を決して雄図の達成を図ろうとするものでもない。観光は一般に喜ばしい楽しい休暇であり、旅行であり、“pleasure trip”なのである。そして人は誰もが豊饒をよるこび、貧窮を忌む。明るさを好み、暗さを嫌う。温暖をたのしむが、寒冷には背を向ける。遊

興は心を惹くが、勤労には反発する。これが人間である。この性質を「向日性」(Heliotropism)と呼ぶが、これが最も端的に現れるのは観光地の選択についてである。南仏リヴィエラやカリブ海は、いま世界で最も名の知れた観光地域であるが、ツーリストの向日性という点から故あるかなと思うのである。

リヴィエラ (Riviera) は、モナコを含むフランス南部およびイタリア西北部の地中海に臨む海岸地帯を指すのであるが、ここでは南仏リヴィエラについて述べる。南仏リヴィエラは「紺碧海岸」(Côte d'Azur) と呼ばれ、東はイタリアとの国境に近いマントンから西はサントロペに至る海岸地帯で、その間にニース、カンヌ及びアンティーブのような世界に名の通った「高級な」観光地を含んでいる。かのモナコ王国があるのもここである。素晴らしい風景美に恵まれ、陽光は実に眩いばかりの明るさで、豪華な宮殿と見紛うばかりのホテルや有名人の別荘が立ち並んでいる。もちろん、一般住民の生活は静かに営まれているものの、総じてリヴィエラは、日光浴をし、水に泳ぎ、ギャンブルをやり、美食をし、美女を愛し、ナイトクラブで飲みかつ踊るといった金持ち族の大遊園地とも称すべきものである。

一八世紀の著名な英国小説家スモレット (Tobias Smollet) が、結核療養のためはじめてニースを訪れたのは一七六三年十二月であった。その頃のニースの人口は一万二千に過ぎなかった。一八五〇年代には三万五千になり、今日では市内の人口が三三万二千、市の周辺を合せると四三万八千に達している。当時のニースはサルジニア王国の支配下にあった。これがフランスに所属するに至ったのは約百年の後である。スモレットの著書 "Travels in France and Italy" を読んでか、やがて多数の英国人がこの地方を訪れて滞在するようになったが、風景美を楽しむためではなく、専ら避寒静養のために、陽光のない寒いイギリスの冬を逃れて、"sunny winter resorts" としてのリヴィエラへはるばるやって来たのであった。その後、来訪するイギリス人の数は次第に増加し、

土地を求めて別荘を建てるものも多く、かくてニースの有名な「イギリス人遊歩道」(Promenade des Anglais)が生まれたのである。

一九世紀の半ば過ぎには鉄道が通り、リヴィエラは急速に発展した。西欧諸国の帝王 (Têtes Couronnées) や貴族が続々と訪れ、リヴィエラは一種の光輝を帯びる土地となった。英国のヴィクトリア女王、オーストリアのフランツ・ヨーゼフ一世、露国のアレキサンドル二世などである。

更に時代が移って二〇世紀を迎えると、高級リゾートとしてのリヴィエラの生活様式、特に快楽の追求という点で指導的役割を果たす人物が現れ、リヴィエラの社交界に大きな影響を与えた。後にエドワード八世として英国の王位を継ぎ、退位してウインザー侯となった英国皇太子プリンス・オブ・ウェールズである。米国籍のシンボン夫人との恋愛は大きな話題を提供した。また、リヴィエラで最も有名なプレイボーイと言われたアリ・カインの豪華な生活やアメリカ女優リタ・ヘイワースとの贅をつくしたその結婚式など、モンテ・カルロのカジノなどと並んで、リヴィエラは「欧州の道徳的汚水溜め」(the moral cesspool of Europe) であるという主張を裏づけるものであった。

一方、グラッドストーン、ロイド・ジョージ、チャーチル、クレマンソー、アリスティド・ブリアンというような政治家、ロバート・ルイス・ステイブソン、D・H・ロレンス、カサリン・マンズフィールド、サマセツト・モーム、ヘミングウェイ、フィッツジェラルド、更にフランスのヴィクトル・ユゴー、メリメ、モウパッサン、アンドレ・ジイド、コレットのような作家、ピカソ、アンリ・マチスのような画家、カルーソー、シャリアピン、パブロワ、ニジンスキー、イサドラ・ダンカン、サラ・ベルナルのような人々、それからチャップリンやディートリヒのような映画スターまで、リヴィエラを訪れここに滞在した有名人はまことに綺羅星の如くで

ある。

これらの人々が、その影響力から言って、リヴィエラのイメージを世界に喧伝したことは間違いない。しかし、それは世界の一般大衆にとっては「高嶺の花」としての観光地のイメージであり、次元を異にする世界のこととしてであった。けれどもこれが次第に「民主化」され、服装も簡素化され、むしろはだか (the bikini and the topless) が強調されるようになったのは、第一次大戦後から次第に勢力を増してきたアメリカ人の影響によるものである。

タイム誌によれば（註六）、観光旅行者の求めるものは昔から四つの「S」であるという。すなわち、太陽 (Sun)、海 (Sea)、砂丘 (Sand) およびセックス (Sex) である。砂丘ないし砂浜を除けば、ほかの三つはリヴィエラには極めて豊富である。満ち溢れるばかりである。リヴィエラに産するものといえは、華やかな陽気さ、楽しさがそれである。“Gaiety is its business.”——これが人の評価である。

リヴィエラ地方を支えているのは正に観光事業である。しかも、その観光事業を今日の姿につくり上げたのはフランス人ではなく、多く外国人であった。それ故、「コート・ダジュールを創り上げたのは外国人であった」(Les étrangers ont créé la Côte d'Azur.) と言われているのである。今日、イギリスの休暇旅行者の多くはスペインのコスタ・ブラバに去った。リヴィエラで特に目立つ存在は、アラブの族長や石油成金たちである。

五、観光事業の諸相

人が観光行動を行うためには時間的余裕、すなわちレジャーの時間がなければならない。同時に、十分な経済的余裕、すなわち可処分所得を持たなければならない。要するところ、観光は消費活動である。そして、近代生活においては、消費は極めて快いものと言える。まことに「お客様は神様」なのである。

また、人は観光において最大限の自由を享受することが可能である。最近の管理された観光形態では、必ずしも十分に自由を楽しむということは許されないにしても、社会生活における十重二十重のしがらみから脱却して解放感を味わうのは大きな喜びであるはずである。

経済が発達し人々の生活水準が上昇するにつれて、人々の心の中にはいわゆる観光意欲 (Wanderlust) がうずき出す。観光需要の発生である。これを総合的に捉えると、観光市場になる。一方、この観光意欲を満足させるものの供給をはかる世界が出来^{しゅつらい}する。この供給側は、あらゆる方策を講じて観光市場に自己を売り出し、ツーリストの誘致を図ろうと試みる。すなわち観光宣伝である。しかもこの供給側は激しい競争に晒される。そのため、できるだけ需要側にアピールするような措置をとり、更にこれを宣伝することになる。便利で快適な交通網を完成し、ホテルその他の宿泊施設の整備を図り、観光資源の開発に努力する、というようなことである。こうして観光事業が誕生する。

観光事業の効用は経済的には「見えざる輸出」として説かれ、国際関係の上からは文化的交流の促進、国際親善の増進、世界平和への寄与などがその効用として挙げられている。「観光は平和へのパスポート」 (Tourism is the passport to peace) ということは、国際連合が一九六七年を「国際観光年」と定めるに当たってのモットーであった。

しかし、今日は観光事業に対するこのような認識は、余りにも素朴であると断ぜざるを得ないような事態を迎

えている。「山のあなたの空遠く／「幸」住むと人のいふ。」（註七） こういう抒情的な憧憬から夢を追って旅に出る人、遠くはるかな未知の世界“wild blue yonder”を探りたいという人、——このような人達がいま居なくなつたわけではないが、これらの浪漫主義者は現代の観光往来からは見棄てられている。いまは大衆を動員し、管理し、組織化して行かう観光のみが榮えているが、資本の論理が他の行き方を許さないのである。かくて企業化された観光活動は必然的に団体旅行となる。いわゆる「パッケージ旅行」(package tours)である。

人の欲求を満たすところの何ものか、人に訴える何らかの魅力、それらを有するものが観光資源であつて、換言すれば観光価値を生み出すものが観光資源であると定義してよいであろう。自分の金と自分の時間を使って行かう観光行動ゆえ、人は観光資源を求めるに当つては極めて自由な選択ができる筈である。しかし、交通機関の座席にせよホテルの部屋にせよ、旅行斡旋業者が大量に予約し買い占めてしまうため、旅行者は多くの場合パッケージ旅行を購入してこれに参加するほかに、選択の自由はかなり制限されるわけである。従つて、団体旅行を企画し組織する側に最大限の利潤をもたらすことの期待される観光資源のみが選ばれ提供されることになる。

六、地中海クラブ

英国のトマス・クック (Thomas Cook) は世界の旅行業者の祖と言われているが、彼はバプテスト派の福音伝道者でかつ禁酒運動家であつた。そして観光旅行が人類の進歩に役立つものであるということを信じて疑わなかつた。だから彼は自ら組織し案内した団体客に対して、高い道義性を要求した。トマス・クックの旅行斡旋

に対するこのような態度に一八〇度反対の立場をとっているとも言えるのがフランスのジルベール・トリガノ (Gilbert Trigano) である。彼は、戦後三十年、世界の二十数箇国に八〇の「ヴィラージュ」 (village)、すなわち「村」と呼ぶ総合的観光施設を経営する「地中海クラブ」 (Club Méditerranée) の創立者である。

トリガノは観光に対して独自の見解を有し、「われわれは裸で生まれ、裸で死んで行く。人生のただ一つの重要な要素は財産ではなく、享受し楽しむことだ。百万長者として死ぬことではなく、億万長者らしく生きることこそ大切なのだ、」と言っている。地中海クラブは、会員に対して「ヴィラージュ」滞在のパッケージ旅行を販売し、チャーター機を利用して送り込み、「村」では地元住民の生活と隔離された独特のヴァカンスを過ごさせる、というように、業務を一貫したシステムとして行っている。

「村」での滞在は一週間単位であり、一日三食の賄付き、すべて貨幣は使用することが許されず、独自の代用通貨で用を弁じ、新聞、テレビ、電話などとは絶縁し、自然に帰った生活を楽しむことができるよう配慮されている。各種のスポーツ、ダンス、演劇、コンサート、読書、工芸教室、エクスカーション等、好みに合った時間の過ごし方ができるようにしている。これらの世話役・指導員を G・O・O (Gentils Organisateurs) と呼んでいるが、多くはフランスの青年で、元気がよく、何くれとなく「ジャンチ・マンブル」 (Gentils Membres)、すなわち客である会員たちの世話をする。時には恋愛ごっここの相手もするという。

地中海クラブは年間数十万人の利用者があり、ホテル・チェーンとしても今日では世界有数の組織にまで成長を遂げた。この急速な成長の秘密は、会員である客に完全に近い自由な生活を保証していることであろう。日常生活を取り囲む禁忌や呪縛から解放された人々が、自然児に立ち帰り、夢を追い、いわゆる "lotus-eater" になる、——たとい一、二週間であろうと、この生活が許されるのである。地中海クラブの会員が殖え続けるのは故

なしとしない。

地中海クラブの魅力を、会員たちは三つの「B」に要約している。「Bronzer」（日焼けする）、「Bouffer」（腹一ぱい食う）、「Baiser」（キスする）の三つである。太陽と飲食とセックスと、これらが企業としての地中海クラブの営業方針の中に取り込まれているのである。

七、買春観光

「日本の対韓経済進出が……韓国内（韓国政府ではない）で批判をあびる中で『キーセン観光』に群らがるウエーム（倭奴）の末裔たちに対する憎悪の炎も、とみに高まっている。韓国のキリスト教婦人連合会は『日本の男性が韓国女性を性の奴隷にしている』という訴えを日本のキリスト教婦人団体に発したし、……国内では日本キリスト教協議会婦人委員会が九月二十一日に、日本人観光客のキーセン漁りとそれを助長している旅行社を非難する声明を発表、……」

右は一九七三年の「世界」十二月号からの引用である。当時、韓国向けの日本人観光客の数は急増したが、それに伴って「キーセン観光」なるものがマスコミを賑わすことになった。その前年の日韓定期閣僚会議の結果、濟州島の観光開発計画に日本が協力することになり、海外技術協力事業団が運輸省の担当官も含めた調査団を派遣、その結果、「濟州島観光開発計画調査報告書」をまとめた。その中に、濟州島が観光地として評価されるには、カジノ、キーセン・パーティーのできるホテルがあることを魅力としてあげ、国際観光の振興方針として「濟

州市は国際観光ルートの特典となるので、市内には外人観光客用のレストランやナイト・ライフが可能な施設の整備が必要となる」という指摘があった。これは日本の国会で取り上げられ、社会党や共産党の議員が日本政府の「協力」の仕方を厳しく追究した。

その後、今度は台湾における日本人旅行者の行状に憤慨した台湾の一旅行業者が、日本の新聞に「君たちは「恥」という文字を知っているか」という広告を何回か掲載して、日本国民にこの問題への注意を喚起するといふことがあった。

一九八〇年の秋頃から、フィリピンでの日本人の「買春観光」がマスコミで大きく取り上げられ、国会でも問題にされた。新聞の投書欄に「買春旅行は妻にも責任」という一主婦からの投書が現れると、数日後には、若い主婦から「夫の買春旅行は悲しいが」夫は小さな会社に勤める身、「お得意様の某大手会社のご招待の旅行を、女房の反対にあつて辞退したとなれば、主人が笑いものにされるのはおろか、会社の営業にまで影響が及びかねないので、」黙って主人を旅行に送り出した、との一文が寄せられる。また、大学生から「広い視野からの買春考を」という訴えがなされるといふ有様である。東京では女性たちによる買春観光反対集会が開かれ、自らも別に買春旅行反対声明を出した観光労連もこれに代表者を送っている。

八、観光における性

こうして日本人のいわゆる「セックス・アニマル」ぶりが論議の対象とされたのであるが、特にかくかくの実

効があがったということはないようである。

一体、日本人は外国人たちに比べて特に「セックス・アニマル」なのであろうか。筆者は、必ずしもそうとは考えない。リヴィエラの歴史を読むと、欧米の上流貴族階級がいかにかに華やかに性の饗宴を楽しんだか、呆れるばかりである。セックスということを抽象的に、最も広義に解釈すれば、人間を、一応飢える心配のない人間を動かす最も強い力はこれであらう。観光行動の底にある衝動もまたこれに根ざしたものとと言える。一時的に日常生活の絆から解かれて自由になった人間が、責任を負うことなく、体面をおそれる心配もない旅先で、好奇心の赴くままに行動するということは人間性の然らしむるところで、何も日本人に限ったことではない。現に、近年大挙してバンコクを訪れているドイツ人観光団の団員が現地の女性と夜を共にしていることは、新聞雑誌のしばしば報ずるところである。また、日本に来訪した欧米のツーリストがいかにかに日本の女性を求めたか、観光関係者の誰もが知っている。しかしながら、ドイツ人にせよ、アメリカ人にせよ、「セックス・アニマル」と呼ばれて難ぜられたことはかつてないのである。

その理由は、欧米人はこの道での大人であり玄人であるが、日本人はまだ素人であり、対応の仕方が稚拙であるがためと言えるであらう。特に、営利第一と考える斡旋業者などの企画に乗って、集团的に事が行われるので、これが人目につき易く、また、日本の驚くべき経済成長を一種の羨望をもって見ている現地の社会が殊更に非難の声を挙げるためであらう。

運輸省観光部はこのほど「東南アジアでのマナー」と題する小冊子一〇万部を作成、東南アジア方面の旅行に出発する日本人に「不健全なナイト・ライフはやめましょう」と訴えるとのことである。しかし、旅行者の心の底にかすかな冒険心がひそみ、現地にそれを誘発する世界が待っているとしたら、この小冊子はその刊行の目的

を達成できるかどうか疑問とせざるを得ない。その上、週刊誌やテレビの影響で性に関するタブーが急速に解除され、ポルノグラフィが大手を振って闊歩できるようになった国内事情が、旅人の冒険心に油をそそぐことにならないであろうか。

九、観光と人間性

観光においてこの際最も重要なことは、旅行者と旅行目的地（国）の住民との関係、需要側と供給側との関係、訪れるものと訪れられるもの（*visiteurs et visités*）との関係、これをどうするかということである。先に述べたように、グリュックスマンは「一時的滞在地における外来者とその土地の人々との間の諸般の關係の總体（*die Summe der Beziehungen*）」が観光であると言っている。英国観光事業の指導的立場にあるリコリッシュ氏（L. J. Lickorish）もこれと同意見である。氏は言う、「観光とは人々の移動であつて、与えられた受入れ地ならびにその居住人口に対する旅行者側の影響（*Incidence*）である。」

従来は、ツーリストの移動は多ければ多いほどよかつた。ツーリストは訪問先で金を落す。これは貿易外収入である。土地の人々はその多きによって潤うところが大きいとされた。しかし、このことは再検討されなければならぬ時機に立ち到っている。ツーリストの大群は貴重な観光資源を破壊する。いわゆる観光公害である。観光開発の名の下に美しい自然が消滅しつつある。

観光往来は国際親善を増進するという。その通りであろう。しかし、外国において女性が商品として提供さ

れ、これを商品として買うという行為、これは国際親善にも国際理解の増進にもつながるものではない。売るものも買うものも、双方とも傷つき、墮落するからである。と同時に、こうしなければ日常の生活が立ち行かない人々が存在する。観光という華やかな喜ばしい事象の裏側にはこのような悲惨が見られるということ、これはやはり観光学の今後の課題として忘れてはならないことである。

観光は人間の行うところである。自ら清しとして一段高く構え、義憤に似た口調で倫理性を説くのは無意味である。人間の強さ美しさと同時に、人間の弱さ醜さにも眼を向ける。「人間の事の何ものもわれに無関係なりと思わず」(Nihil humani a me alienum puto.)——テレンティウス(Terentius)のこの言葉は、正に観光学の視点であるべきであると思うのである。

資料と文献

註一 井上萬寿蔵「観光と観光事業」国際観光年記念行事協力会 昭和四二。

註二 Prof. Dr. Robert Glücksmann : Allgemeine Fremdenverkehrskunde. Verlag von Stämpfli & Cie. Bern, 1935 (邦訳「観光事業論」 非売品)

註三 Dr. Artur Bormann : Die Lehre vom Fremdenverkehr. Verlag der Verkehrswissenschaftlichen Lehrmittelgesellschaft m. b. H. bei der Deutschen Reichsbahn, Berlin, 1931 (邦訳「観光学概論」 昭和五十六年、この書の翻刻版が東京の橘書院という書店から出版される計画のようである。)

註四 John Heeley : "The Definition of Tourism in Great Britain. — Does Terminological Confusion Have to Rule?" — Revue de Tourisme, No. 2, 1980

註五 朝日新聞 一九八一・三・一〇

註六 Time, August 18, 1975

註七 上田敏詩抄(岩波文庫)

「観光事典」 財団法人日本交通公社 昭和四八。

「観光基本法解説」 学陽書房 昭和三八。

栗原孟男「観光と英語」 研究社 昭和三九。

Penguin Travel Guides — Europe 1980-81. Houghton Mifflin Company. Boston. 1979

Somerset R. Waters : The Big Picture — World Travel Trends & Markets 1980-81. ASTA Travel News.
New York, 1980

Patrick Howarth : When the Riviera was Ours. Routledge & Kegan Paul, Ltd, London, 1977.

Pierre Defert : Pour une Politique du Tourisme en France. Les Éditions Ouvrières, Paris, 1960.

René Barejje et Pierre Defert : Aspects Économiques du Tourisme. Éditions Berger-Levrault, Paris, 1972.

Louis Turner and John Ash : The Golden Hordes — International Tourism and the Pleasure Periphery.

Constable, London, 1975.